

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月28日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530680

研究課題名（和文）複数テキスト読解を介して論争的ディスコースに参加する力の解明

研究課題名（英文）The capability of participating in controversial discourse through the reading of multiple texts.

研究代表者

小林 敬一（KOBAYASHI KEIICHI）

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：90313923

研究成果の概要（和文）：本研究では、論争的な複数テキスト読解を介して論争的ディスコースに参加する力を、テキスト評価、テキスト間関係の理解、裁定を中核的コンポーネントとする批判的統合という枠組みで捉え、各コンポーネントにおける大学生の実態（彼らがそれぞれのコンポーネントにおいて困難を抱えていること）と、コンポーネント間の因果的關係（特に、テキスト評価→裁定、テキスト間関係の理解→裁定）を実験的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study approached the capability of participating in controversial discourse through the reading of controversial (multiple) texts in terms of critical integration, which is composed of three key components: textual evaluation, understanding of intertextual relations, and reconciliation. Some experiments were conducted, and the results revealed the actual conditions of undergraduate students (their difficulties in each of the components) and the causal relationships between the components (especially, “textual evaluation → reconciliation” and “understanding of intertextual relations → reconciliation”).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学，教育心理学

キーワード：高次リテラシー，複数テキスト処理，批判的統合，書かれた論争

## 1. 研究開始当初の背景

社会の中で人が主体的・能動的に生きる上で、政治・社会問題などを巡る様々な論争的ディスコースへの参加（発言，投稿，投票など）が欠かせない。注目すべきは、そうした論争がしばしば、新聞や雑誌，書籍，インターネット上に様々な論者が書くことにより現出しているという点である。論争的な複数

テキストの確かな読みを踏まえて自分自身の意見を書き出す能力（以下、「複数テキスト読解を介した意見産出能力」）は、論争的ディスコースへの参加を支える重要な力の1つと言える。ところが、PISA読解力調査等で示されたように、日本の子どもたちは、書かれたテキストを踏まえて書く力に特に問題があるとされる。そうした現状の中で、

さらに高次なりテラシーである「複数テキスト読解を介した意見産出能力」をどのように育てていくかは、日本の大学教育における危急の課題である。

近年、(複数テキストを簡単に入手でき、自分の意見を発信することが容易な) インターネットの普及を背景にして、複数テキスト読解や複数テキストを踏まえた文章産出に研究者の関心が高まっており、実証的な研究も徐々に増えている。だが、それらの研究では、読解や文章産出を論争への参加という観点から捉えておらず、論争的な複数テキストの読解から意見産出に至るまでの過程や能力については十分検討されてこなかった。本研究はこの未解決課題に取り組むために実施された。

## 2. 研究の目的

本研究は、「複数テキスト読解を介した意見産出能力」を育てる教育プログラムの開発に向けて、その基盤となる過程・能力を解明しようとするものであり、論争的関係の理解から自分の意見を産出するまでの過程とそこで必要とされる能力を実証的・理論的に検討した。具体的には、

(1) 複数テキスト読解を介した意見産出過程・能力の解明を行った。

(2) 大学生を対象にして、複数テキスト読解を介した意見産出能力の実態把握を行った。

## 3. 研究の方法

本研究では、文献レビューと実験の大きく2つの方法を用いた。実験の方法はその実験目的と密接に対応しているため、各実験方法の詳細は次の「研究成果」の中で示す。

## 4. 研究成果

### (1) 批判的統合とそのコンポーネント

複数テキスト処理に関する先行研究の総合的レビューにより、複数テキスト読解を介して論争的ディスコースに参加する力の核になる概念として「批判的統合」を、さらに批判的統合の核になる3つのコンポーネントを抽出・提案した。

批判的統合とは、複数テキストを批判的に吟味し関連づけながら、それらのテキストに描かれた事象を推理したり論点に関して判断を下したりする過程とその所産(心的表象や文章など)を指す。テキスト情報そのまま受け入れて単純に統合する過程(相補的統合)と違って、複数テキストの主題に関係するテキスト情報であっても、吟味の結果、既知の事実と矛盾する、出所が信頼できないなど見なされれば、その一部あるいは全てが後の推理や判断で棄却されることがある。

この批判的統合に関連する先行研究が測定の対象としてきた複数テキスト処理の諸

側面を整理・総合すると、「テキスト評価」「テキスト間関係の理解」「裁定」の3つに分類できる。それぞれについてさらに詳しく説明すると、次のようになる。

①テキスト評価：これは、潜在的に利用可能な複数のテキストからさらなる処理を行うに値するテキストを絞り込む「取捨選択」と、信頼性や有用性、論拠の確かさ、テキストから推測される書き手の信念や意図、動機、立場などに照らして、各テキスト内容に留保をつけたり、割り引いて考えたり、順位づけしたりする「重みづけ」からなる。

②テキスト間関係の理解：複数のテキスト間にどのような関係があるのかを意識し理解する過程と所産である。これに失敗するとテキスト間情報の統合に支障を来すことがあると考えられる。例えば、ある事象について2つのテキストの記述が矛盾しているにもかかわらず、その矛盾に気づかなければ、読み手は両方の記述を鵜呑みにしてしまうかもしれない。

③裁定：テキスト評価とテキスト間関係の理解を踏まえて、事象を推理したり論点に関する判断を下したりする過程とその所産が裁定である。妥当な裁定と言えるためには、証拠にもとづく推理や判断であることが必要条件となる。

先行研究の知見などから、3つのコンポーネントの間には Figure 1 のような関係を仮定できる。しかし、特に図の点線矢印部分の関係を実証的に検討した研究は見当たらず、また各コンポーネントに関する(日本の)大学生の実態についてもほとんど明らかになっていない。そこで、これらの問題に対する答えを探る試みとして、次の(2)~(4)の実験を実施した。

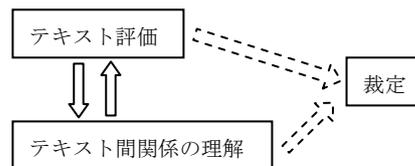


Figure 1 批判的統合の中核的コンポーネント

### (2) テキスト評価と裁定の関係 I

先行研究の知見は、大学生の裁定における1つの顕著な問題として、彼らが自分の産出した意見文の中で(意見文を書く際に読んだ)複数テキストの議論に触れていない場合が多いこと、またそれに言及していても、しばしば出所を明示しないことを示唆している。原因の1つとして、彼らが複数テキストの議論を十分に評価しないまま自分の意見を生成している可能性が考えられる。テキスト評価の不十分さが複数テキストの関連する議論を無視した意見文産出につながって

いるのかもしれない（逆に言えば、議論を十分に評価していれば、それが意見文に反映されるはずである）。これは出所を記載しなかったり明記しなかったりする問題にも当てはまる。しかし、もう1つの可能性として、複数テキストを十分に評価していても、論述時に自分の意見を書くよう求められていることからあえてテキストの議論や出所に触れないということも考えられる。本研究では、読解時あるいは論述時にテキストの議論を評価するよう促すことで裁定のし方がどう変わるかを調べ、それにより上の2つの可能性を検討した。

実験には大学生 84 名が参加し、彼らはそれぞれ2（読解時の議論評価促進あり、なし）×2（論述時の議論評価促進あり、なし）の4条件のいずれか1つに割り振られた。実験参加者はまず事前の態度を調べる課題を行った後、対立する2つのテキスト（新聞に掲載された「ヒューマンエラーの責任」を巡る2つの意見文）を条件ごとの教示に沿って（評価促進あり条件の場合、実験で用いたテキストの議論は2つの争点で対立していたことから、各争点に関するテキストの議論を評価するよう求めた）読んだ。そして、テキストの回収に続き、自分の意見を書く課題を行った。

結果は以下の通りである。まず、テキストの議論の取り入れについて、本研究の実験参加者は一般に消極的であった。すなわち、2つのテキスト両方の議論を意見文に取り入れた実験者の割合は、争点1で28.6%、争点2で16.7%に留まっていた。

次に、各争点に関する議論の取り入れに読解時と論述時の評価促進が影響を及ぼしたかどうか調べるために、議論の取り入れ（両テキストの議論=2、一方=1、なし=0）を従属変数、読解時と論述時の評価促進を独立変数とする順序回帰分析を争点ごとに行った。しかし、モデル適合度はどちらの争点についても有意でなかった。

一方、意見文に取り入れた議論の出所を明示するかどうか読解時と論述時の評価促進が影響を及ぼしたかどうか調べるために、出所の明示（両テキストの出所を明示=2、一方=1、なし=0）を従属変数、読解時と論述時の評価促進を独立変数とする順序回帰分析を争点ごとに行った。その結果、両方の争点ともに論述時の評価を促進した条件の方がそうでない条件よりも出所明示が多かった。ただし、実験参加者が読解中にメモした内容を見ると、争点に関わらず、読解時の評価促進あり>なし、となった。つまり、読解時の評価促進はメモ上での出所明示を促すことがわかる。

メモ上での出所明示に読解時の評価促進の効果が見られたことから、それがなければ、

テキストの議論を考慮してもその出所には注意を向けない傾向があることが示唆される。実際、読解時の評価なし条件で、テキストの議論を出所とあわせてメモしなかった実験参加者の割合は58.1%に達した。

以上の結果をまとめると、まず、論争的な複数テキストを読んで産出する意見文にテキストの議論に触れない、たとえ触れたとしても出所を明示しないという裁定の問題が日本の大学生において顕著に見られた。また、出所を明示しない問題の原因の1つとして読解時・論述時のテキスト評価を彼らが自発的に行わないことが示唆された。

### (3) テキスト評価と裁定の関係Ⅱ

(1)で述べたように、論争的な複数のテキストを読んで意見文を産出する場合、各テキストを評価しながらその情報を統合していく批判的統合が必要になる。テキストを評価するための方法には様々なものがあるが、その1つとして出所情報（著者、タイトル、テキストのジャンル、出版社、出版年など）を参照する方法(sourcing heuristic)が挙げられる。これは、出所情報からそのテキストの信ぴょう性や書き手の目的・バイアスなどを判断するヒューリスティックである。複数テキスト読解において大学生が限定的ながら出所を参照すること、またそれが（テキストに対する批判的吟味を必要としない）相補的統合に影響することを示す知見はいくつかあるものの、批判的統合との関係は明らかにされていない。そこで、本実験では出所参照によるテキスト評価と裁定の関係、テキスト評価のこの側面における大学生の特徴について検討した。

実験では、大学生154名に論争的な2つのテキスト（実験者が作成した、血液型性格を肯定する議論を述べた文章と否定する議論を述べた文章）を読んでもらった。出所情報の違いが及ぼす影響を調べるために、実験参加者の半数には肯定テキスト、否定テキストにそれぞれ信ぴょう性の高い出所情報（大学教員が執筆した「性格心理学入門」と低い出所情報（会計士が個人的に作成したウェブサイト）を付加して呈示し、残りの半数にはそれらの出所情報を逆に呈示した。読解後、テキストを見ないで、実験参加者は意見文を書き、それから各テキストの評価（読みやすさ、専門性、信ぴょう性、説得力）と出所情報の自由再生を行った。

まず、実験参加者が読解中にメモをとったり下線を引いた出所情報のカテゴリー数（著者名、職業、出版年、タイトル、出版元）は  $M = 1.85$  ( $SD = 2.24$ )であった。一方、再生された出所情報のカテゴリー数は  $M = 2.36$  ( $SD = 1.80$ )。Table 1には、各カテゴリーの出所情報（テキスト毎）をメモしたり下線を

引いた人数と再生した人数をそれぞれ示す。

Table 1 出所情報をメモ・再生した人数

	著者	職業	出版年	タイトル	出版元
メモ・下線					
肯定	70	36	14	16	6
否定	73	36	11	16	7
再生					
肯定	52	87	9	14	10
否定	55	88	10	25	14

これらの結果から、実験参加者が読解中に考慮した出所情報はごくわずかでしかもその種類にかなりの偏りがあることがわかる。

次に、裁定に及ぼすテキスト評価の影響を調べるために、2つのテキストの説明をどう裁定しているかにより、各意見文を(血液型性格に対して)肯定的統合(肯定テキストの議論に賛成している and/or 否定テキストの議論に反論している, など), 中立的統合(判断を保留している, 両方のテキストを肯定・否定している, など), 否定的統合(否定テキストの議論に賛成している and/or 肯定テキストの議論に反論している, など)の3つに分類した。それぞれの人数は32名, 32名, 87名であった。各カテゴリーを従属変数, 条件(肯定テキスト・信ぴょう性高+否定テキスト・信ぴょう性低条件, 肯定テキスト・信ぴょう性低+否定テキスト・信ぴょう性高条件), 事前態度, 個人的関連性, 出所情報の考慮(出所情報のメモ・下線数+再生数), 各テキスト評価を説明変数にした多項ロジスティック回帰分析を行った結果, 条件は肯定的統合と否定的統合の区別に有意に影響した。この結果は, テキスト評価が裁定のし方に影響を及ぼすことを示唆している。ただし, 意見文の中で出所情報に明示的に触れながら裁定を行った実験参加者はわずか9名でしかなく, 意識的・方略的に出所情報を活用した裁定を行ったわけではないことが示唆される。

以上の結果をまとめると, 出所を参照するテキスト評価が裁定のし方に影響を及ぼすことが示唆された。ただし, 大学生による出所情報の参照や利用はかなり限定されたものであった。

#### (4) テキスト間関係の理解と裁定の関係

裁定には, ((2)で取り上げた以外に)もう1つの側面がある。それは, 異なる論者の様々な議論を, そしてそれらと自分の考えを論述文の中でどう提携・対立させたかという, 読み手/書き手が紙上で繰り広げた討議(紙上討議)である。ただし, 論争的な複数テキストを読んで産出した意見文の中で, 大学生がどのような紙上討議を行うかについて実証的に検討した研究はほとんど無い。本実験

では, 第1の目的として, その特徴を明らかにした。具体的には, 論争的な複数テキスト間関係の主要な形態の1つとして「論駁する-される」で特徴づけられる論駁的關係を取り上げ, 大学生が意見文の中でそれに応答するかどうか, 応答するとしたらどう応答するか調べた。テキスト間の論駁的關係に応答するとは, 例えば, その論駁的關係を肯定したり, 逆に, 論駁に反論することなどでその論駁的關係を否定したりすることなどを指す。また, 第2の目的として, (Figure 1に示したコンポーネント間の関係を踏まえて) テキスト間関係の理解が紙上討議のし方に影響するかどうか, 影響するとしたらどう影響するか検討した。さらに, 第3の目的として, 複数テキストを関連づけるよう促す読解目標がテキスト間関係の理解を改善するか, またその効果が紙上討議にまで影響を及ぼすかを検討した。

実験では, 大学生95名を論争理解目標(論争の構図を明らかにしながら複数テキストを読む)条件と意見生成目標(サマータム制度導入に対する自分の意見をまとめながら複数テキストを読む)条件に割り振った。テキスト材料は, 実験者が作成した, サマータム制導入に関して賛否の意見を述べた4つのテキスト(以下, テキストの著者の名前から, 田中, 鈴木, 野村, 佐藤と呼ぶ)である。4つのテキストの間には, (a)省エネ効果を争点にして, 鈴木の議論を野村が論駁し, さらにその野村の議論を佐藤が論駁するという関係と, (b)経済的影響を争点にして, 田中の議論を野村が論駁するという関係があった。実験参加者は4つのテキストを課題目標に沿って読み, それから, 自分の意見を論述する課題, テキスト間の争点理解課題, 論駁的關係理解課題をこの順で行った。

結果は以下の通りである。まず, テキスト間関係の理解に読解目標がどのような影響を与えたか調べた。その結果, (争点理解課題で測定した)争点を正しく理解した人数は論争理解目標群が意見生成目標群よりも多い傾向が見られた。また, 論駁的關係理解課題の成績(テキスト間の論駁的關係をどのくらい正しく理解していたか)については, 論争理解目標群>意見生成目標群であった。つまり, 論争理解という読解目標を与えることで, テキスト間関係の理解が促された。

次に, 実験参加者が産出した意見文の中でどのような紙上討議が行われていたか調べたところ, テキスト間の論駁的關係に全く応答していなかった者と論駁された論者の議論をその論駁に反論せずに利用していた者が全体の半数以上を占め, 逆に, 論駁的關係に賛成したり論駁に反論したりしてその3つ全てに応答した者はごく少数(4名)に留まった。この知見は, テキスト間の論駁的關係を

肯定するにせよ否定するにせよ、大学生がその延長線上に自分の議論を展開するのが容易ではないことを示唆する。

最後に、紙上討議のし方にテキスト間関係の理解が及ぼす影響を調べるために、紙上討議のし方（論駁的關係を踏まえた各応答＝1、応答なし＝0、論駁的關係に踏まえていない各応答＝－1として得点化し合計したもの）を従属変数とし、争点の理解、論駁的關係の理解、読解目標、サマータム制度導入に対する事前態度、サマータム制やその導入に関する熟知性を説明変数とした順序回帰分析を行ったところ、争点の理解、論駁的關係の理解、読解目標が有意であった。この結果は、争点や論駁的關係の理解の失敗が論述文の中でその論駁的關係の延長線上に自分の議論を展開できない一因になっている可能性を示唆する。

さらに、読解目標がテキスト間関係の理解を介して紙上討議に効果を及ぼしているか検討するために、各論駁的關係を踏まえた応答とそれ以外の応答を対にしてそれぞれを従属変数とし、読解目標を独立変数に、争点の理解と論駁的關係の理解を媒介変数に、事前態度と熟知性を共変量にして間接効果を推定した（ブートストラップ標本数 5000）。その結果、従属変数に対する読解目標の間接効果は有意であった。間接効果が有意であったということは、読解目標の付与によって紙上討議のし方をある程度、改善することができるということが言えるかもしれない。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 小林敬一，大学生による書かれた論争への参加－テキスト間関係の理解が果たす役割－，教育心理学研究，査読有，印刷中
- ② 小林敬一，初等・中等教育における複数テキストの利用－新学習指導要領（国語）とその解説の分析－，静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）査読無，62号，2012，pp. 55-70
- ③ 小林敬一，複数テキストの批判的統合に及ぼす議論評価促進の効果，静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇），査読無，61号，2011，pp. 113-128
- ④ 小林敬一，複数テキストの批判的統合，教育心理学研究，査読有，58巻，2010，pp. 503-516
- ⑤ 小林敬一，大学生は複数テキスト間の潜在的論争をどう理解するか？，静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇），査読無，60号，2010，pp. 85-96

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 小林敬一，書かれた論争への参加－論争的な複数テキスト読解とそれに基づく議論文の産出－，日本教育心理学会第 53 回総会，2011 年 7 月 24 日，北海道立道民活動センターかでの 2・7（札幌市）
- ② 小林敬一，複数テキストの批判的統合に及ぼす出所参照の効果，日本心理学会第 74 回大会，2010 年 9 月 20 日，大阪大学（豊中市）
- ③ 小林敬一，大学生の実験レポートに見る引用の技術，日本心理学会第 73 回大会，2009 年 8 月 27 日，立命館大学（京都市）

〔その他〕

ホームページ等

<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小林 敬一 (KOBAYASHI KEIICHI)  
静岡大学・教育学部・准教授  
研究者番号：90313923

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：